



マンフレッド・シュパイデル教授の講演 「ブルーノ・タウト、日本の工芸芸術と家具」

田中 辰明

お茶の水女子大学名誉教授・工博

はじめに

ドイツにおけるブルーノ・タウト研究の第一人者であるアーヘン大学のマンフレッド・シュパイデル教授が久しぶりに来日し、2023年3月26日から4月中旬まで日本に滞在した。その間に教授は4月3日(月)にタウトてらこや(前島美江代表)の主催により、高崎市の少林山達磨寺の講堂で(写真1)、4月11日(火)熱海ブルーノ・タウト連盟(矢崎英夫会長)主催により熱海市起雲閣音楽ホールで(写真2)講演を行った。なおこの講演会は日本バウハウス協会(浅野利忠理事長)が共催した。高崎、熱海の講演会はほぼ同じ内容であった。この講演の概要を報告する。

高崎の講演では少林山達磨寺の広瀬正史住職が司会と進行を務めた。また会場として使用された少林山達磨寺講堂はブルーノ・タウトが日本のバウハウスを目指し、タウト建築学校の開校を試みた建物である。綿密な授業計画も練られていたが、スポンサーの井上房一郎の賛成が得られず、計画はとん挫した。



写真1 2023年4月3日に高崎の少林山達磨寺の講堂で講演するマンフレッド・シュパイデル教授



写真2 2023年4月11日に熱海の起雲閣音楽ホールで講演するマンフレッド・シュパイデル教授

1. マンフレッド・シュパイデル教授の講演

皆様、こんにちは、大変久しぶりに来日する事が出来ました。コロナ禍が決して終息したとは思っておりませんが、渡航の制限が解除されましたので、懐かしい皆様方にお会いできることを願って来日いたしました。私はコロナ禍で講演活動もできませんでしたので、自宅に籠り、「ブルーノ・タウト、日本の工芸芸術と家具」^{註1)}(写真3)という本の執筆をしておりました。大変厳しい仕事でしたが、やっと完成しましたので、肩の荷が下りました。今日はその本の内容をお話したいと存じます。

ブルーノ・タウトは1920年代に多くの集合住宅、ジエ

ドルングをベルリンに建設し、有名な建築家でした。ここではベルリンのプレッツラウアー地区に建設したカール・レギエンのジエドルングを紹介します(写真4、写真5)。カール・レギエンを含めてタウトが設計したジエドルング4件が2008年にベルリンのモダニズムとして世界文化遺産に登録されました。カール・レギエンとはベルリンで活躍した社会主義の政治家の名前です。タウト自身も社会主義の思想に基づいて労働者の健康に配慮した住宅建設に取り組みました。その結果、モスクワ市議会から、首都モスクワでのより大きなプロジェクトのための建築事務所設立の招待を受け、1932年4月、ベルリンからモスクワに移りました。彼は日々の仕事の詳細を手紙の形でベルリンの事務所のパートナーであるフラ

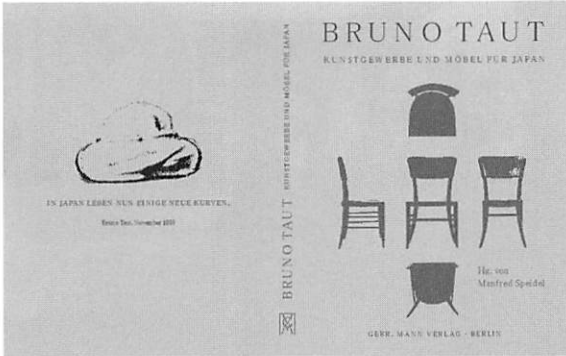


写真3 マンフレッド・シュバイデル教授が2023年に出版した「ブルーノ・タウト：日本の工芸芸術と家具」の表紙、並びに裏表紙（原文：Bruno Taut, Kunstgewerbe und Möbel für Japan, Gerb. Mann Verlag, Berlin）



写真5 ベルリンのタウト設計のカール・レギエンの集合住宅（Wohnstadt Carl Legien）（1928-1930）鳥瞰写真、2008年に世界文化遺産登録



写真4 ベルリンのタウト設計のカール・レギエンの集合住宅（Wohnstadt Carl Legien）（1928-1930）2008年に世界文化遺産登録

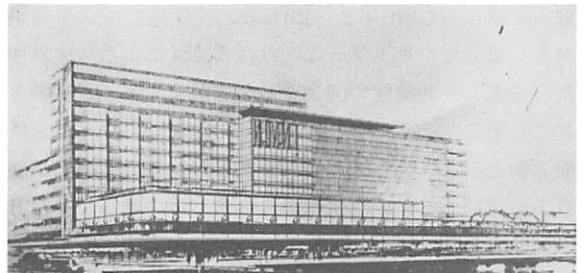


写真6 タウト設計のモスクワ、インツォーリストホテル案（実施されなかった）計画案は4種類残っている

ンツ・ホフマンに送りモスクワでの経験を記録しました。

バーバラ・クライス^{註2)}は、彼の手紙をソ連の政治と建築の動向に関する詳細な記述とともに出版しました。

タウトはモスクワに6ヵ月滞在し、インツォーリストホテルの設計に取り組みました(写真6)。しかしモスクワの官僚主義、能力の適正な評価の欠如、外国人に対する同僚や政治家たちの偏見、資材の不足、建築に対する考え方の違いなどから、共同作業が不可能であることが次第に明らかになりました。タウトはモスクワに長く滞在する必要はないと考えるようになりました。1932年9月8日、彼は次のように書きました。「この頃、スイス系アメリカ人のマリア・エリザベス・コップという(ニューヨークの)ロックフェラー研究所で働く医師が、しばしば私たちと一緒に過ごしました。彼女はもうすぐベルリンに来ます。どうか彼女と連絡を取って下さい。私が設計したベルリンの最も重要な住宅地区(ジードルング)を

見せてあげてください。とても重要なことですが、彼女はロックフェラー研究所で、労働者の居住地を建設するために私を招待したいと思っています」と。ロックフェラー研究所に加えて、私が名誉会員である建築家グループ^{註3)}の日本への旅行も考えているのです。結局のところ、私には行くべきところが多すぎ、世界は狭すぎるのです」。

仕事があまくいかず、彼に対する反感も高まり、モスクワを去る可能性が高まってきました。1932年12月11

日、彼はこう書きました。「ウラジオストクからゲストとして招待されれば、春に行つて1ヶ月ほど滞在するつもりだ。それは素晴らしいことだし、本になるかもしれない」。12月30日、モスクワでの滞在について次のようにコメントしています。「ベルリンからどう見えるか興味があります」。タウトが手がけ、独立した建築事務所を設立し、設計する予定であったインツーリスト・ホテルのような建物のための資金は、1933年には承認されませんでした。1933年2月3日、「昨日、京都の建築家上野伊三郎と原則的な約束をしました。私はアメリカ建築家協会とコップ夫人に、日本の桜の開花とともに始める世界一周旅行を実現するよう手紙を書きました。ベルリンの後に、また新たな新天地が現れるのです」。2月7日、インツーリストのマネージャーであるクルツ氏に、ベルリンからウラジオストクまでの切符を手配するよう依頼しました。当局が切符を手配できないなら、自分で手配するつもりでした。2月15日、モスクワからベルリンに向かう列車の中の事を日記に次のように書いています。「私はソ連に対する信頼を失いました。深刻な損害を被りました。それが、私が今ソ連国境を越えドイツへ向かっている理由です」。

わずか2週間後の1933年3月1日、彼は生涯の友人エリカとともにベルリンを離れ、再び列車に乗ることになるとは予想もしていませんでした。ヒトラーが政権を取った直後の1933年2月28日夜、帝国議会放火事件が発生しました。ヒトラーはこれは共産党による放火事件だと主張し、共産党の国会議員を逮捕するという行動を起こしました。その勢いで、ソ連で働いたタウトにも危険人物とみなされるようになりました。そして警察がタウトを逮捕するという情報が入りました。そこでタウトはエリカと共にベルリンから逃れることになりました。

タウト一行がベルリンを出発する時点で、日本とアメリカでの講演の準備はほぼ完了していたかもしれませんが、長旅の準備は完了していませんでした。具体的には、地中海を渡ってオデッサに行き、列車でソ連を経由する旅でありましたが、適切なビザを取得するためにパリに寄り道する必要がありました。最初に彼らは3月5日にスイスに無事到着し、その後、タウトは旅行記『日本まで』^{註4)}を書き、チューリッヒの出版社フェスリと出版契約を結ぶことができました。パリでは、ジュリアス・ポゼネルが新聞『L'architecture d'aujourd'hui』の編集者として彼を日本特派員にしました。その後、タウトは同紙に3本の主要な記事を掲載しております。^{註5)}

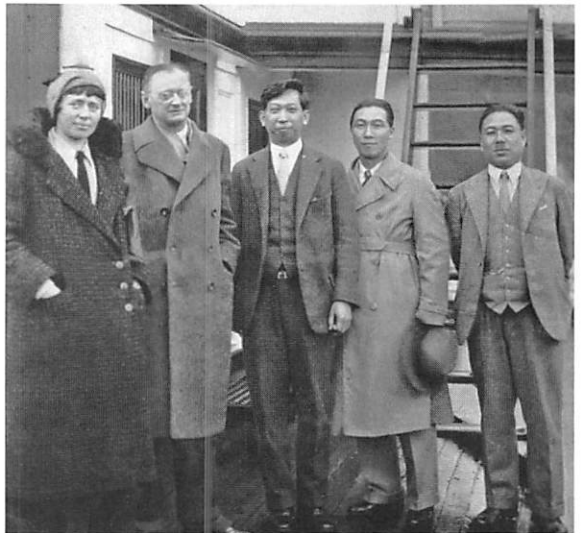


写真7 ブルーノ・タウトと伴侶エリカ・ヴィッティヒの敦賀港到着(1933年5月3日) 上野伊三郎(早大建築大正10年卒)、中西六郎(早大建築大正12年卒)、中尾保(早大建築大正12年卒)が出迎えた。

トルコからは、東京の大倉邸の原稿と写真を編集者に送り続けております。

長旅を終えて、1933年5月3日、敦賀港に到着したタウトとエリカは上野伊三郎ら日本インターナショナル建築会の会員により迎えられました(写真7)。彼らはタウトとエリカの受け入れについて万端の準備をしていました。代表の上野伊三郎が二人を京都に案内し、大丸百貨店の店主である下村正太郎の大邸宅にゲストとして滞在しました。タウトは建築家仲間とともに、日本の歴史的建築物や近代建築の数々を見学しました。特にタウトが日本に到着した翌日、1933年5月4日でしたが、それはタウトの誕生日でした。上野はその日にタウトとエリカを桂離宮に案内しております。タウトは桂離宮の簡素な美しさに「泣きたくなるほどの美しさだ」と絶賛しています。日記に「今日は恐らく私の一生のうちで最も善美な誕生日であつたらう。」と記しています。

日本インターナショナル建築会が主催して大阪と東京で講演会を開き、上野伊三郎が通訳を務めました。

タウトは1ヶ月の間に30人以上の建築家に会いました。その多くはすでにヨーロッパを訪れており、タウトやベルリンの彼の建物を訪れたこともあったのです。ドイツ語が堪能な者もありました。つまり、上野伊三郎、吉田鉄郎、倉田周忠らと並んで、日本人建築家の「ドイツ学派」がタウトの面倒を見たのでした。特に、1929年にシュトゥットガルトでパウル・ボナツのもとで木造

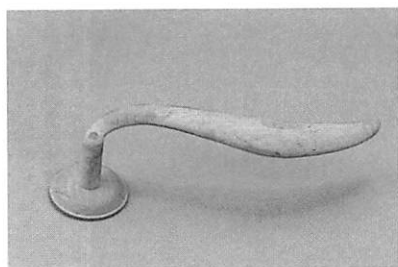


写真8 ブルーノ・タウト設計の木製ドアノブ、
1934年仙台工芸指導所



写真9 洗心亭の縁側に座るブルーノ・タウトと八幡村の眺め

耐震構造の研究で博士号を取得し、1932年に東京に事務所を構えた久米権九郎は、豊富な人脈を生かしてタウトの依頼や仕事を請け負い、タウトの生活を支えました。久米に紹介された明治書房の高村は、1ヵ月も経たない5月末、タウトに日本での印象を綴った本の執筆を依頼しました。タウトはこれを日本文化史評論と結びつけ、1933年7月12日に原稿を完成させました。

この本は1934年6月まで出版されませんでした。その後大成功を収め、2年のうちに3版が出版されました。この活動は4ヶ月間しか続きませんでした。タウトは1934年5月にもオファーを受け、大倉社の磁器製造を1ヶ月間視察し、最終的には久米を通じて、高崎で日用品や家具をデザインし、製作してもらう機会を得ました。ブルーノ・タウトとエリカは日本に3年半滞在しましたが京都、東京に加え、仙台市、特に群馬県の高崎での滞在が長かったのです。仙台では1933年11月から1934年3月迄工芸指導所で工芸の指導を致しました。その時のタウトの作品をご紹介します(写真8)。木製のドアノブです。久米権九郎は群馬県沼田の出身でした。群馬県の人脈で高崎の実業家井上房一郎を紹介しました。井上房一郎はタウトに自分の事業を手伝ってもらう事を依頼し、住まいとして少林山達磨寺を紹介しました。その結果境内にあった洗心亭と呼ぶ2間の木造住宅に住むようになりました。1934年8月1日の事でした。広瀬大蟲住職一家のもてなしに洗心亭での生活をすっかり気に入ってしまいました。洗心亭の縁側でタウトが寛いでいる写真があります(写真9)。タウトはベルリンの郊外ダーレビッツに1926年から27年にかけて設計し、

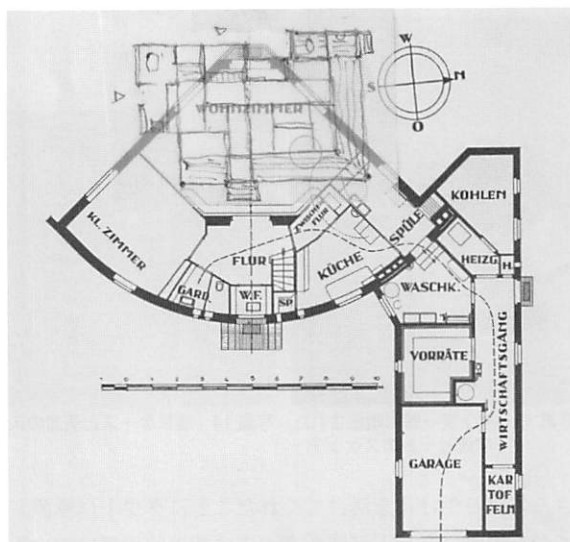


写真10 タウトが1933年来日するまで住んでいたベルリン郊外ダーレビッツの住宅と洗心亭の平面図を重ねた。タウトは洗心亭を大変気に入った。

日本に亡命のような形でやってくるまで住んでいた自邸があります。この自邸の平面図に洗心亭の平面図を重ねて描いております。この洗心亭の平面図もタウトが描いたものです(写真10)。

二つの住宅の共通点を見出しタウトも安堵したようです。

タウトは洗心亭で、精神的な場所である床の間と生活の場である便所が極めて薄い間仕切りによって仕切られていることを知ります。日本の建築は素晴らしいと日記に書いております。洗心亭の床の間には住職次女の敏子



写真11 洗心亭であぐらをかくタウト、床の間には広瀬大蟲住職の次女敏子さんが毎日花を活けた。

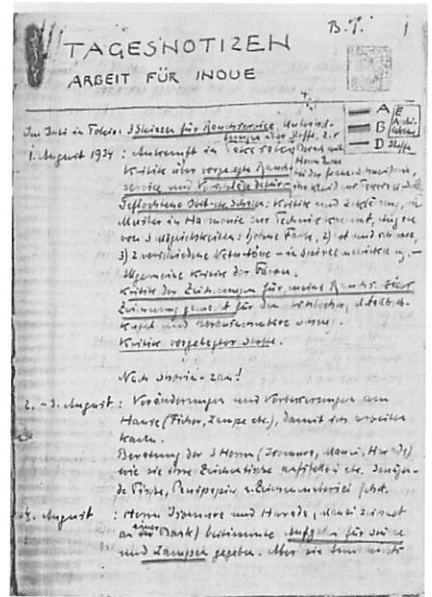


写真12 タウトが井上房一郎にあてて書いた仕事のメモ

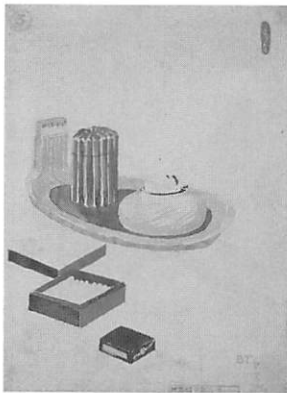


写真13 井上房一郎に贈呈された喫煙セットのスケッチ

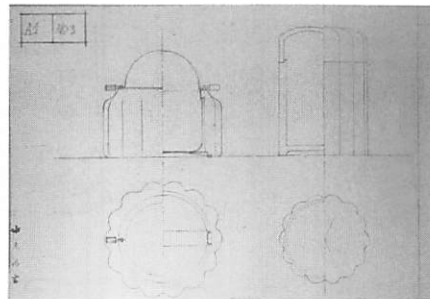


写真14 煙草ケースと灰皿のスケッチ

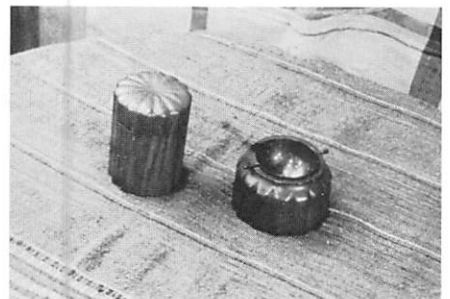


写真15 仕上がった煙草ケースと灰皿の写真

さんが毎日生け花を活けてくれたことにタウトは感激しております。タウトが洗心亭の床の間の前で寛いでいる写真をご紹介します(写真11)。タウトは1934年8月1日洗心亭に入る前に高崎で井上房一郎にこれからの仕事について話し合いました。その時のメモが残っております(写真12)。タウトは井上房一郎に最初から不信感をいだいていたようであります。その事を8月1日の日記に記述しております。しかしタウトは井上房一郎に喫煙器具セットを贈呈しようとして、そのスケッチを残しております(写真13)。またその制作用の図面も残っております(写真14)。その図面をもとに実際に制作された、煙草入れと灰皿の写真も残っております(写真15)。タウトは井上工房で椅子も制作しております(写真16)。タウトはヴァイマル共和国時代にベルリンで沢山の労働者用の住宅を設計しております。そこには厨房兼食堂のよう

な部屋がありました。その部屋に置いてあった木造の椅子をイメージして椅子を作りました。ですから決して上等の椅子ではありません。

少林山達磨寺に残っているタウトの椅子は広瀬住職のご努力により、複製が天童木工の手により作られております。本来のものより3倍くらいの重さがあり高級感が出ています。お寺はこの販売益でタウト資料館を境内に建設する計画ですので、ご協力いただけると幸いです。タウトは洗心亭で工芸品のスケッチに励みますが、スケッチばかりしていて、実際の工芸品が制作されないのは面白くない



写真16 少林山達磨寺に残るタウト制作の緑色の木製椅子

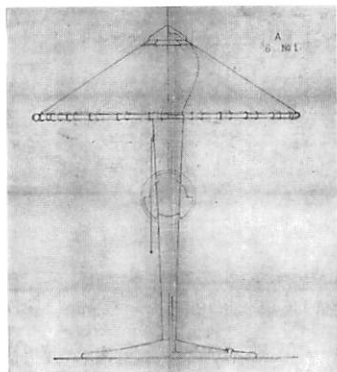


写真17 卓上照明器具(木製、竹製)のスケッチ



写真18 竹製卓上照明器具と小物入れ(1935年に丸善で開催された展示会に出展された)

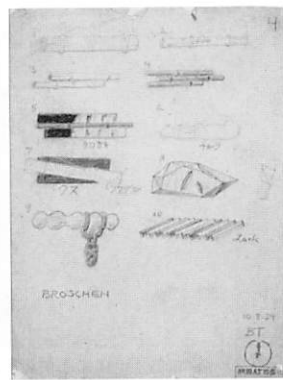


写真19 ブローチのスケッチ(鉛筆と色チョーク)



写真20 ブローチとバンドのバックル

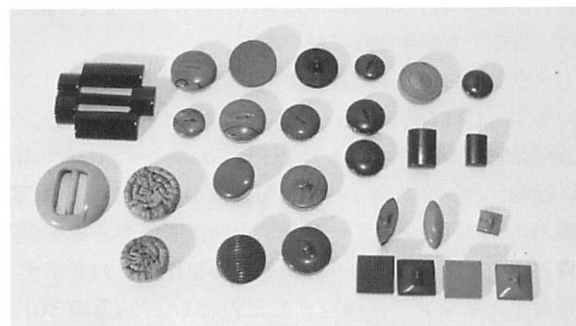


写真22 ボタンとバックル

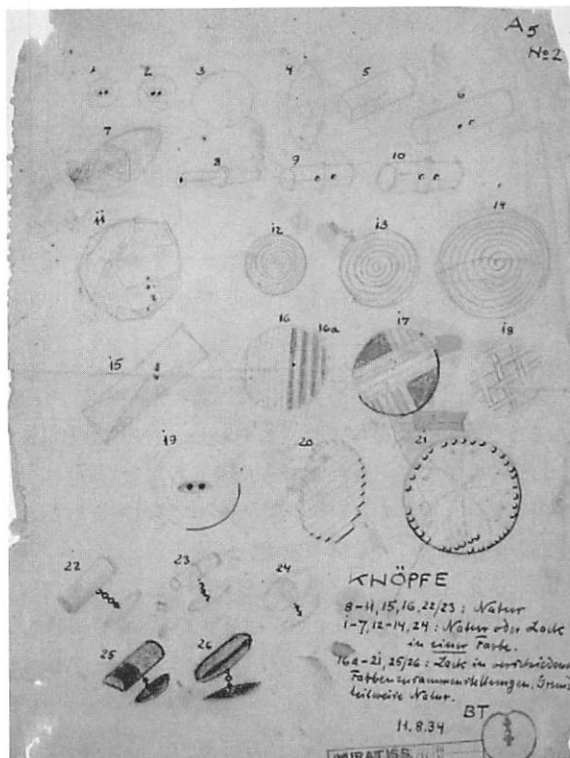


写真21 28個のボタンのスケッチ(鉛筆と色チョーク)

として8月4日、井上房一郎が洗心亭を訪ねた際に申し入れをしております。洗心亭で描いた卓上ランプの例が残っております(写真17)。これは後に実物が制作されました。この写真も残っております(写真18)。この卓上ランプは数種類制作されておりますが、ランプの台と支柱には竹が使用されたものが多いのです。タウトは桂離宮を見学した際にも竹に感激しましたが、日本の竹を大変気に入ったようです。タウトは8月10日にはブローチのスケッチも制作しております(写真19)。洗心亭からの外

の眺めはあまりにも美しく、仕事をするときには集中できるように故意に美しすぎる自然に背を向けて行つたと日記に書いております。ブローチのお話を致しましたが、これも後に制作されました。タウト作のブローチ、婦人用ベルトのバックルの写真が残っております(写真20)。また婦人服のボタンも制作しました。そのスケッチが残っております(写真21)。これらはスケッチをもとに実際に制作されました。その写真も残っております。ここにはボタンだけでなく、バックルも含まれております(写

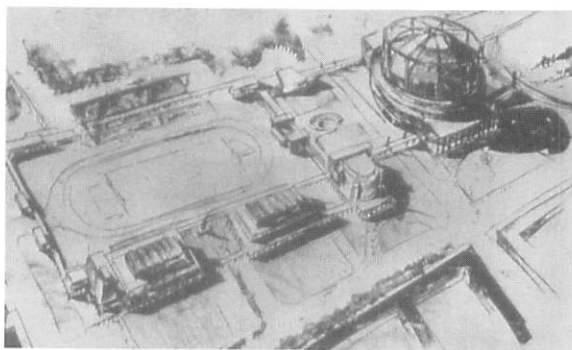


写真23 シュペアーによるゲルマニア計画

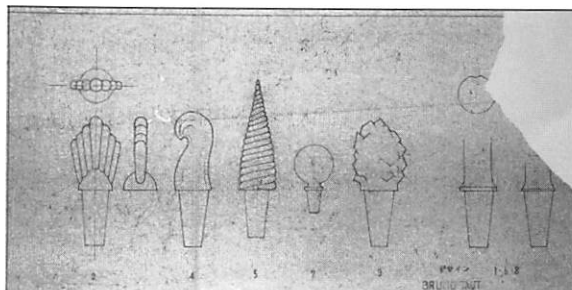


写真24 コルク製のワイン栓 1934年8月18日



写真25 傘の柄

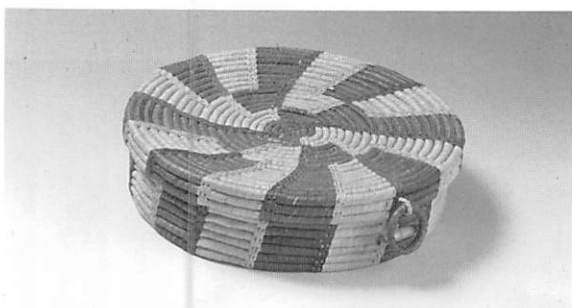


写真26 竹皮で制作した縫物籠、1934

真22)。

タウトとエリカは広瀬大蟲住職一家の温かいもてなしに洗心亭の生活に安らぎを感じました。しかし脱出してきたベルリンのこと、残してきた家族の事を思わない日はありませんでした。1933年、ナチスが政権を取ると、タウトが主張していた表現主義、国際主義、モダニズム建築は否定されるようになりました。そしてナチス好みの第三帝国国粹主義建築が幅を利かすようになりました。これを主導したのが、アルベルト・シュペアー (Albert Schpeer, 1905-81) でした。氏は1934年にナチス党の主任建築家となりました。ベルリンの建築総監に任じられ、「ゲルマニア計画」を発表しました(写真23)。タウトはこの事を非常に憂いました。しかしどうする事も出来ず、自分は「籠の中の鳥だ、行動の自由はない」(1934年8月1日の日記)と嘆きつつも工芸作品のデザインに励みました。ワインなどのガラス瓶のコルク製の栓の設計も行いました。この図面が残っております(写真24)。また傘の握りを制作しております。ここでもタウトが好きであった竹を材料として使用しております(写真25)。タウトは竹皮を使用してキャンディー入れを作っております。竹皮草木染で茶葉で染めますと茶色になります。茶色の皮と本来の色である白い皮を交互に使用すること

により、アクセントのあるキャンディー入れが作られました。これも1934年の作品です(写真26)。このタウトの竹皮編み技術は高崎の前島美江さんによって受け継がれ、現在でも制作されております。

タウトは白い竹皮だけを使用した手提げ籠も制作しています。1934年の作品です(写真27)。同じ年に婦人の装飾品制作の為のスケッチを行っております。一枚の絵に腕輪、ネックレス、ベルト等が描かれております(写真28)。竹製のフロアーランプを制作しております(写真29)。タウトは漆塗りの円形容器を作っております。恐らく、キャンディーを入れたのでしょう(写真30)。また吊鐘状の形態をした黒色の漆塗りのキャンディー入れも制作しております(写真31)。1935年12月29日は英語で、「高崎の皆様1936年新年おめでとう」と色紙を描いております。色紙の左下には浅間山が噴火した絵を添えております。タウトが洗心亭に滞在中に浅間山が噴火し、火山灰が洗心亭にまで降り注ぎました。タウトはこれを「ドイツと日本が戦争に向かっていることに対する地球の怒りである」と日記に記しております。この絵はタウトが少林山の広瀬大蟲住職に贈呈したもので、寺はそれを記念スタンプとして使用していました(写真32)。タウトは黒色の漆塗りの手鏡とその台も制作しております



写真27 手提げのついた紡ぎ糸入れ籠

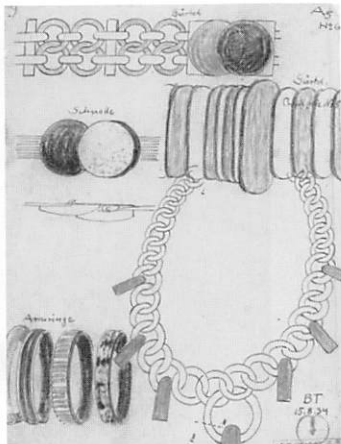


写真28 リング状の鎖で作成したベルト(1934年8月)スケッチ

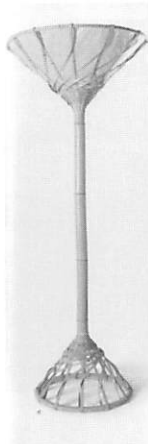


写真29 竹製フロアスタンド

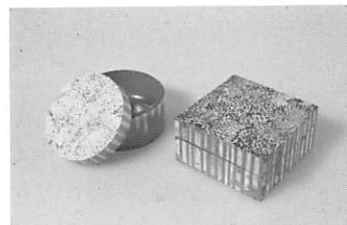


写真30 漆塗りの装飾がある蓋付き容器



写真31 釣鐘状のラッカー塗りボンボン入れ(黒色)

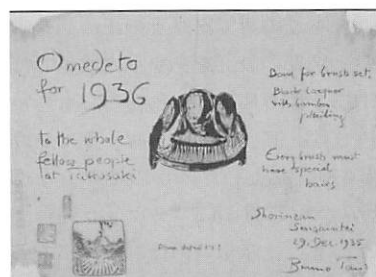


写真32 1936年の賀正



写真33 手鏡と手鏡たて

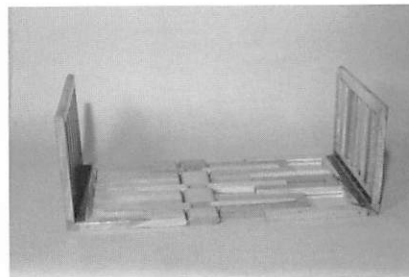


写真34 伸縮可能な本立

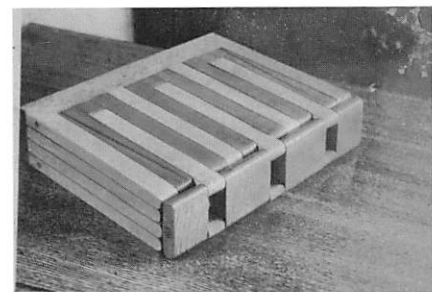


写真35 伸縮可能な本立を畳んだ状態

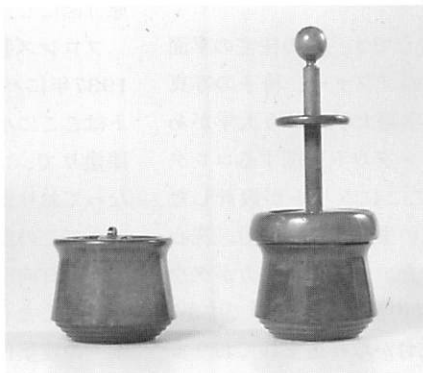


写真36 煙草入れとパイプ立て



写真37 収納部付机、スケッチ、1934

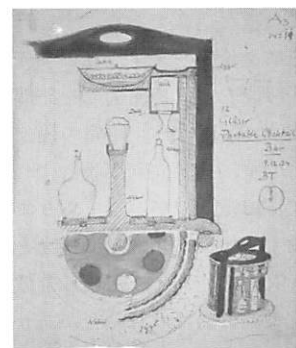


写真38 可搬式カクテルバーのスケッチ 1934

(写真33)。タウトは日本の住宅は狭い事から、伸縮できる本立てを制作しております。伸縮の機構が判る写真を示します(写真34)。またその本立てを畳む事もできるようにしました(写真35)。タ

ウトは煙草入れとパイプ立ても制作しております(写真36)。タウトはカクテルバー用の小型テーブルも設計しております。この中には酒器や各種酒瓶が収納できるようになっております(写真37)。このカクテルバーのスケッチは1934年12月9日に作られました(写真38)。タウトは財閥であった安田氏の邸宅の設計にかかわっております。本来久米権九郎が行っていた仕事ですが、家具などの設計を依頼されました。間取りは発注者が決めてし

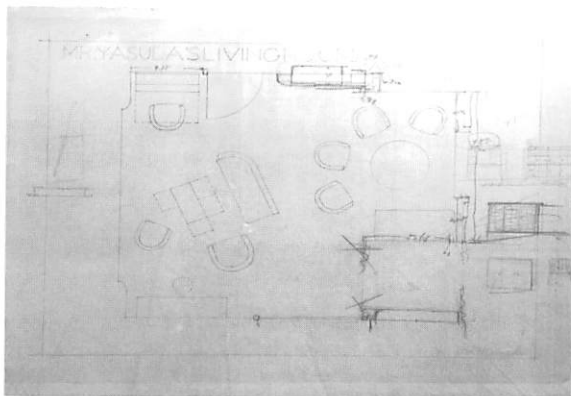


写真39 安田邸居間平面図



写真40 安田邸居間暖炉とソファー、椅子3脚



写真41 秘書机、高崎のタウト記念館

認められております。ミラテスの商標もタウトがデザインしました(写真42)。ミラテスは成功し、熱海の日向別邸の発注者日向利兵衛もこの店でタウトの工芸品を購入し、それに気に入り、別邸の設計をタウトに依頼しております。タウトは1934年10月7日に動物のおもちゃのスケッチをしております。狐、タヌキ、豚、カモシカ等が見られます(写真43)。またいくつかのモダンな卓上時計を設計しております(写真44)。タウトは燭台の設計も行っております。ここに示すものは日本人がその原寸図を描いたものです。タウトがスケッチした燭台を原寸図にしたものです(写真45)。

ブロンズ製の卓上燭台も制作しております(写真46)。1937年にパリで万国博覧会が開催されましたが、タウトはここに小物入れを出展しております。内部は朱色の漆塗りで、上部の蓋はスライド式に開閉できるようになっております。非常に繊細な作品です(写真47)。

さてこの度、熱海市斎藤栄市長初め関係者のご努力で熱海市日向別邸の大修理が終了し、再公開される運びになりました(写真48)。日向別邸はタウトの日本に残る唯一の建築作品です。非常に貴重な遺産であります。今後とも良い状態で保存される事を希望します。私の手元に1936年9月20日にタウトが竣工した日向別邸を訪問した時の写真が残っております(写真49)。洋間の段々で写したのですが、タウトの左には日向別邸設計についてタウトに助言した建築家吉田鐵郎⁶⁾が写っております。この段々から正面を見ますと相模湾、さらに初島を展望する事が出来ます(写真50)。タウトは桂離宮を激賞していました。桂離宮の古書院の前には月見台があります。中秋の名月の日に月見台に座り、目の前の池に満月が浮かぶのを鑑賞できるように仕掛けられていました。

まい、タウトは不満があったようです。この住宅の平面図です(写真39)。タウト設計のソファー、椅子の写真です(写真40)。高崎市に創造学園大学という大学がありました。この大学はブルーノ・タウトに関するコレクションを持っておりました。ここにタウトが設計したワーキングデスクが展示されておりました(写真41)。洗心亭には小さな書見台がありました。ここでエリカがタウトの口述筆記を行い、また文書の清書をしたのですが、このワーキングデスクにも書見台が取り込まれております。

井上房一郎は井上工房で制作された工芸品を東京の銀座で販売しようとしていました。当時の銀座西6丁目の瀧山ビル1階に「ミラテス」という販売所を1934年12月に开店しております。井上房一郎はタウトと共に柳宗悦、バーナード・リーチに店の在り方について助言を受けております。インチキな品、ゲテ物は決して置かない、その結果、ブルーノ・タウトが作った作品のみを販売することに決めました。ブルーノ・タウトはそれにタウトが指導し、他の人間が作った作品も販売するという条件を出し、



写真42 ミラテス商店看板

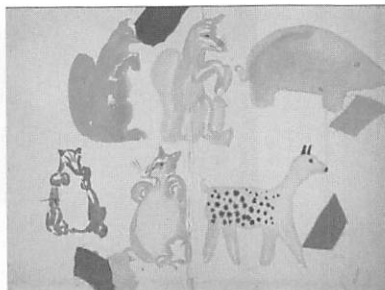


写真43 動物の玩具、1934年10月7日



写真44 卓上時計

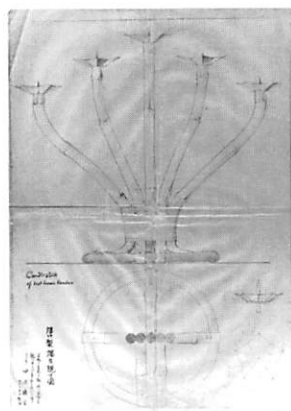
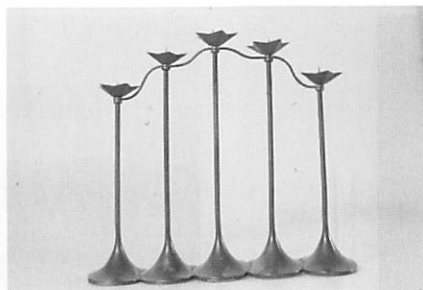
写真45 茶色の竹を使用した
5本のローソク立て

写真46 ブロンズ製5本のローソク立て

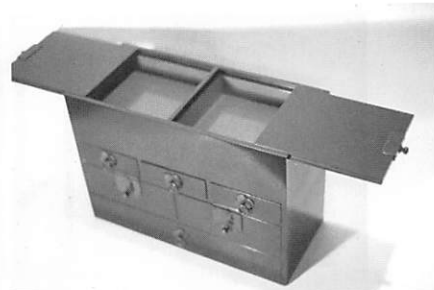


写真47 パリ万博出展の小筆箱、1937

日向邸におきましても洋間の段に座り、相模湾に昇る月を鑑賞できるように設計されていました。その月の光が前面の木目張りの床に写るように床は黒色に磨かれておりました。

さて今迄お話いたしましたように、タウトは仙台、高崎滞在中は工芸品の制作と指導に傾注致しました。専ら工芸品を作成していたようにも見受けられますが、実は一方で著作活動も一生懸命やっておりました。ほぼ毎日日記を書いておりましたし、後日沢山の読者を得る「日本美の再発見」などの著述を行っておりました。洗心亭に入ったのは1934年8月1日でしたが、5日には婦人之友社に「現代建築」という小論文を寄せています。婦人之友社は自由学園の創立者羽仁もと子が編集を行っておりました。この方はタウトを正しく理解し、婦人之友には数回にわたりタウトに寄稿を依頼しておりますし、羽仁もと子との対談が掲載されております。このようにタウトは実によく働きました。スーパーマンでした。しかしタウトは日向別邸が竣工した直後に招かれてトルコへ行ってしまいます。そして2年後1938年12月24日に58歳の若さで亡くなりました。私の講演で、タウトが制作した喫煙器具を沢山ご紹介しました。そうです、タウト

はヘビースモーカーだったのです。これがタウトの命を縮めました。私は自著「日本の工芸芸術と家具」^{註1)}の裏表紙にはタウトがスケッチした煙草入れ用いました。健康の為喫煙は控えめにしましょう。できれば禁煙してください。皆様、長生きをして下さい。ご清聴ありがとうございました。

おわりに

シュバイデル教授は熱海での講演を終え、数日後にドイツへ帰国した。タウトをこよなく愛するシュバイデル教授はタウトの日本に残る唯一の作品、日向別邸を非常に気にかけている。地下室にタウト設計のソファがあったが、これが壊れ、2階の倉庫に収納されていた。シュバイデル教授はこれを気にし、そのソファの再生を申し出、費用を全額負担した。2023年4月11日の熱海での講演の直前にうまく日向別邸に収まっているのを自らの目で確認し、安堵した(写真54)。東京からドイツ向かう機内でも安心して休むことができたであろう。

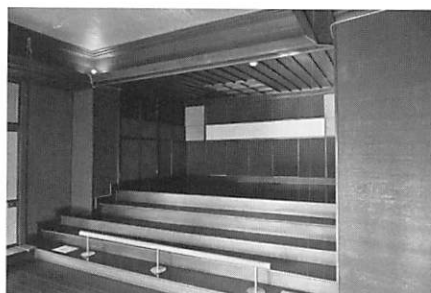


写真 48 改修工事が終わった日向別邸洋間

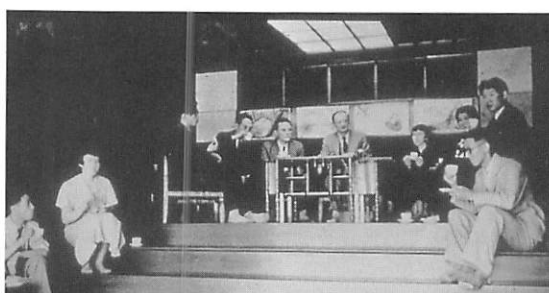


写真 49 1936年日向別邸の竣工



写真 50 日向別邸から相模湾、初島を望む

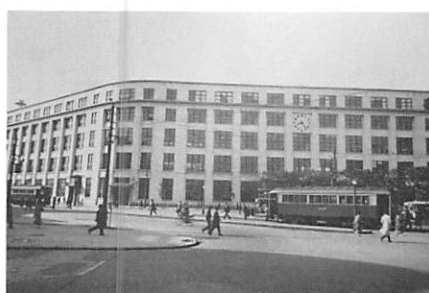


写真 51 竣工当時の東京中央郵便局外観
(上由美子さん提供) 吉田鐵郎設計



写真 52 竣工当時の東京中央郵便局内部
(上由美子さん提供) 吉田鐵郎設計

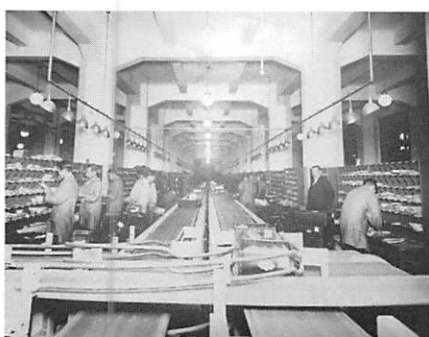


写真 53 竣工当時の東京中央郵便局内部
(上由美子さん提供) 吉田鐵郎設計



写真 54 シュパイデル教授が日向別邸に寄贈したソファー

註

1. Manfred Speidel, Bruno Taut, Kuntgewerbe und Möbel für Japan, Gebr. Mann Verlag, Berlin
2. Barbara Kreis, Schönheit, Sachlichkeit und Sozialismus. Bruno Taut. Moskauer Briefe 1932-1933, Berlin 2006
3. 建築家上野伊三郎を会長とする日本インターナショナル建築会
4. Bruno Taut, „Bis Japan“, in: Bruno Taut, Ex Oriente Lux, hg. Von Manfred Speidel, Berlin 2007 S184-220
5. Architecture Nouvelle au Japon, in: L'architecture d'aujourd'hui (1935) H.4, S. 46-83 ; Une habitation japonaise (Villa Atami) (1937) H.1, S65-68
6. 吉田鐵郎(1894-1956)：富山県出身、1919年東京帝国大学建築学科卒業、逓信省に入省し、逓信建築の先駆者の一人となる。代表作は1933年の東京中央郵便局。(写真51. 52. 53) ブルーノ・タウトが吉田の作品を激賞した。

〈参考文献〉

1. 田中辰明、ブルーノ・タウト、日本美を再発見した建築家、中公新書2169 (電子書籍もあり)
2. 田中辰明、ブルーノ・タウトと建築・芸術・社会、東海大学出版会
3. Manfred Speidel, Bruno Taut in Japan, Das Tagebuch Erster Band Zweiter Band, Dritter Band Gebr. Mann Verlag
4. 田中辰明、ドイツのエコ建築家W. レーナート博士による講演「最近のドイツの建築物省エネルギー化について」、月刊建築上技術2023年9月号
5. 田中辰明ドイツのエコ建築家ヴォルフガング・レーナート博士と筆者の対談、「ブルーノ・タウトの志とSDGs」、月刊建築上技術2023年8月号